

ヒラリー・ハーン バッハ無伴奏を弾く

＜ソナタ&パルティータ全曲演奏会＞

Hilary Hahn

plays J.S.Bach Sonatas and
Partitas for Solo Violin, BWV 1001-1006

2018年12月3日(月) 19:00開演
7:00p.m., Monday, December 3, 2018

2018年12月5日(水) 19:00開演
7:00p.m., Wednesday, December 5, 2018

東京オペラシティ コンサートホール
Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ 共催：(公財)東京オペラシティ文化財団
協力：ユニバーサル ミュージック

PROGRAM

12月3日(月)

J.S. バッハ

J.S. Bach

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第1番 ト短調 BWV 1001

Violin Sonata No. 1 in G Minor, BWV 1001

- | | |
|---------------|------------------|
| 第1楽章：アダージョ | I. Adagio |
| 第2楽章：フーガ アレグロ | II. Fuga Allegro |
| 第3楽章：シチリアーナ | III. Siciliana |
| 第4楽章：プレスト | IV. Presto |

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第1番 ロ短調 BWV 1002

Violin Partita No. 1 in B Minor, BWV 1002

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 第1楽章：アレマンダ - ドゥーブル | I. Allemanda - Double |
| 第2楽章：コルレンテ - ドゥーブル プレスト | II. Corrente - Double Presto |
| 第3楽章：サラバンド - ドゥーブル | III. Sarabande - Double |
| 第4楽章：テンポ・ディ・ボレア - ドゥーブル | IV. Tempo di Borea - Double |

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 ニ短調 BWV 1004

Violin Partita No. 2 in D Minor, BWV 1004

- | | |
|-------------|----------------|
| 第1楽章：アレマンダ | I. Allemanda |
| 第2楽章：コルレンテ | II. Corrente |
| 第3楽章：サラバンド | III. Sarabanda |
| 第4楽章：ジガ | IV. Giga |
| 第5楽章：チャッコーナ | V. Ciaconna |

ヒラリー・ハーン 2018年日本公演 スケジュール

12/3 (月) <東京> 東京オペラシティ コンサートホール ★

12/5 (水) <東京> 東京オペラシティ コンサートホール ★

12/10 (月) <東京> 東京文化会館 *

主催：ジャパン・アーツ
 共催：東京オペラシティ文化財団
 主催：ジャパン・アーツ
 共催：東京オペラシティ文化財団
 主催：都民劇場

PROGRAM

12月5日(水)

J.S. バッハ

J.S. Bach

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第2番 イ短調 BWV 1003

Violin Sonata No. 2 in A Minor, BWV 1003

- | | |
|------------|--------------|
| 第1楽章：グラヴェ | I. Grave |
| 第2楽章：フーガ | II. Fuga |
| 第3楽章：アンダンテ | III. Andante |
| 第4楽章：アレグロ | IV. Allegro |

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第3番 ホ長調 BWV 1006

Violin Partita No. 3 in E Major, BWV 1006

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 第1楽章：前奏曲 | I. Preludio |
| 第2楽章：ルール | II. Loure |
| 第3楽章：ロンドー形式のガヴョット | III. Gavotte en Rondeau |
| 第4楽章：メヌエット I, II | IV. Menuett I, II |
| 第5楽章：ブレ | V. Bourée |
| 第6楽章：ジグ | VI. Gigue |

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第3番 ハ長調 BWV 1005

Violin Sonata No. 3 in C Major, BWV 1005

- | | |
|----------------|-------------------|
| 第1楽章：アダージョ | I. Adagio |
| 第2楽章：フーガ | II. Fuga |
| 第3楽章：ラルゴ | III. Largo |
| 第4楽章：アレグロ・アッサイ | IV. Allegro assai |

12/12 (水) <東京> 東京オペラシティ コンサートホール *

12/13 (木) <名古屋> 愛知県芸術劇場 コンサートホール *

12/15 (土) <西宮> 兵庫県立芸術文化センター-KOBELCO大ホール *

12/16 (日) <宮崎> メディキット県民文化センター(宮崎県立芸術劇場) *

主催：東京オペラシティ文化財団

主催：中京テレビ事業

主催：兵庫県立芸術文化センター

主催：宮崎県立芸術劇場

★ リサイタル * ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団との共演

J.S. バッハ

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ(BWV 1001~1006)

今回のヒラリー・ハーンの来日公演では、J.S. バッハ(1685~1750)の『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ』全6曲(BWV 1001~1006)が、2夜に分けて演奏される。

生前のバッハは卓越した鍵盤楽器奏者として知られていた。とはいえ、当時の音楽家は複数の楽器を演奏するのが一般的であり、バッハは、ヴァイオリン奏者でもあった父に幼少時からヴァイオリンを習い、巧みに演奏したようだ。次男のエマヌエルは「父は青年時代からかなりの高齢になるまでヴァイオリンを澄んだよく通る音色で演奏し、ヴァイオリンでオーケストラを統率していました。(中略)父はヴァイオリン属の楽器の可能性について完全に理解しており、無伴奏のヴァイオリンとチェロのための独奏曲がそれを証明しています」と1774年のフォルケル宛の手紙に記している。実際、1703年にはじめてヴァイマル宮廷に就職したときバッハはヴァイオリン奏者兼従卒として雇われたし、1714年からヴァイマルで楽士長(英語で言うコンサートマスター)をつとめて職務上もヴァイオリンを演奏していたと考えられる。

ヴァイオリンはふつう旋律楽器として扱われ、ヴァイオリン・ソナタというと鍵盤楽器の伴奏がつくものを思い浮かべる人が多いだろう。しかし、ヴァイオリンの2本の弦に同時に弓を当てると2つの音を同時に出すことができるし(重奏奏法)、弓を急速に動かせば最大4つの音をほぼ同時に鳴らせる。バッハの無伴奏曲では、このような奏法を活用し、ヴァイオリン1本で可能な限りの豊かな世界を現出させる。特筆されるのは、同じ旋律を複数のパートで模倣するポリフォニー音楽がヴァイオリン1本のために書かれていることで、旋律の特徴的な部分を強調し、残りを聴き手の想像力に委ねるなどして、最大4パートのフーガを立体的に構築している。無伴奏のヴァイオリンのために高度な技巧の楽曲を書いたのはバッハが初めてではなく、ヴェストホフ(1656~1705)が1683年に出版した組曲が、無伴奏ヴァイオリン用の初出版作品と考えられている。ヴェストホフとバッハは個人的な交流もあったようで、バッハは先輩音楽家たちの作品から学びつつ、技巧的にもより高度で深遠な作品を書いた。

バッハの無伴奏ヴァイオリン曲集は6曲から構成され、各3曲のソナタとパルティータが交互に配置されている。ここでいうソナタとは、バロック時代によく書かれた「教会ソナタ」と呼ばれるタイプの作品で、緩-急-緩-急の4つの楽章で構成される。第2楽章はどのソナタでもフーガで、第4楽章は無窮動タイプの急速楽章になっている。一方、パルティータは、舞曲を中心とする組曲で、楽章数は4、5、6楽章と順に増えていく。舞曲楽章のほとんどは、真ん中に繰り返し記号を置いた2部形式で書かれている(チャッコーナ、ガヴョットを除く)。曲集の6曲のうちはじめ4曲が短調、終わり2曲が長調である。

ベルリンの図書館に所蔵されるバッハの自筆譜(P 967)は、浄書譜だが、献呈先の名前などは記されておらず、バッハが誰のために、あるいは何を目的としてこれらの作品を書いたのかは分かっていない。バッハの同僚だったヴァイオリン奏者や、当時のドイツで活躍していた名演奏家の名前が挙げられることもあるが、バッハ自身も宮廷で自分の能力を披露する

ために演奏したと考える研究者もいる。この自筆譜には1720年という西暦年が記されているが、それは浄書譜の作成年代であり、実際の作曲はもっと前と考えられる。特にBWV1001~1005の5曲は、初期稿における臨時記号の書き方等から、1714年頃までに作曲されたと考えられている。今回の来日公演では、ソナタ第2番とパルティータ第2番の順序を入れ替えたかたちで、1夜に3曲ずつが演奏される。これは、特に有名なパルティータ第2番のシャコンヌとパルティータ第3番のガヴョットを各公演で楽しめるようにということだろうか。あるいは、順番を変えることで、各夜の演奏曲の調の主音をつないだときに三和音(ト-ローニ、イー-ハーホ)が生じるようにしたのだろうか。

なお、ヒラリー・ハーンは17歳だった1997年にデビューアルバムとしてパルティータ第2、3番とソナタ第3番のCDを、そして21年を経て今年、残り3曲のCDをリリースした。9歳の頃から現在まで、毎日バッハを演奏しているといい、まさにライフワークとしてバッハに取り組んでいると言える。たしかな楽曲分析に裏づけられ、それでいて伸びやかなバッハがCDでは聴かれる。会場ではどんな響きを聴かせてくれるのか、とても楽しみである。

[12月3日]

ソナタ第1番 ト短調(BWV 1001)

第1楽章アダージョは、3オクターヴの広がりをもつ和音に始まり、「幻想様式 Stylus fantasticus」で綴られていく。曲集の始まりにふさわしい壮大な印象を与える楽章である。第2楽章はアレグロの4声フーガ。主題は1小節と1音のみという短さで、変形されたり一部が繋げられたりして様々に活用される。主題を含まず16分音符の分散和音が連続する部分もあり、変化を加えている。このフーガは、オルガン曲やリュート曲の稿でも知られる(BWV 539、1000)。第3楽章はシチリアーナ。イタリアのシチリア島由来の名をもつ牧歌的なゆったりとした舞曲で、付点のリズムを特徴とする。この楽章は変ロ長調となり、叙情的にうたわれる。全体は3声で、上2声は下声と対置され、甘美な響きの3度や6度の平行で進むところも多い。第4楽章プレストは、再びト短調となり、16分音符の連続で駆け抜ける。

パルティータ第1番 口短調(BWV 1002)

バッハの頃の組曲には、同じ調のアルマンド-クーラント-サラバンド-ジグという4種類の舞曲が基本舞曲として含まれ、それに前奏曲や他の挿入舞曲が加えられることもあった。パルティータ第1番では、ジグの代わりにプレが置かれ、4種の舞曲とそれらの変奏(ドゥーブル)で構成されている。第1楽章アレマンダ(アルマンドのイタリア語表記)では、フランス風序曲を思わせるような付点リズムと3連のリズムが交代する。ドゥーブルではそれが16分音符の連続に解体され、重音も取り払われて澄んだ印象を与える。第2楽章コッレンテ(クーラントのイタリア語表記)は8分音符の分散和音を主体とする。ドゥーブルはプレストとなり、16分音符で変奏する。第3楽章サラバンドでは、和音を多用して、荘重な宮廷舞踏の雰囲気伝える。

PROGRAM NOTES

ドゥーブルではそれが分散和音となる。第4楽章テンポ・ディ・ボレア(プレのテンポ)は急速な2拍子で、随所に置かれた和音がアクセントとなって進行感を強めている。最後のドゥーブルはやはり分散和音で流れていく。

パルティータ第2番 ニ短調(BWV 1004)

もとの曲集の順ではソナタ第2番となる所、パルティータ第2番が第1夜の演奏会でとりあげられる。パルティータ第2番は、組曲の基本舞曲4つ(ただし舞曲名はすべてイタリア語表記)のあとに、チャッコーナを含む。バッハのシャコンヌ(チャッコーナのフランス語形)として単独でも演奏されることの多い有名な曲である。だが、5つの楽章は共通する低音旋律線(ニ-嬰ハ-ニ-変ロ-イ)をもっており、シャコンヌもパルティータ全体の流れのなかで演奏されるのがふさわしい。組曲全体として沈思するような性格が強く、ヴァイオリンの低い音域が多く使われている。

第1楽章アレマンダは、音階の上行で始まり、3連音型をとり入れながら旋律的に流れていく。第2楽章コッレンテは、3連音型と付点リズムが交代するのが特徴的。第3楽章サラバンダは、和音と付点リズムによる荘重な始まりから、細かい音価で跳躍を多用して高まりをみせる。ジグはフーガ的に書かれることが多いが、この第4楽章ジグは、1本の旋律線で紡ぎ出すように綴られていく。第5楽章チャッコーナは、この組曲全体の半分以上の長さをもつ、規模の大きい楽章。もとは17~18世紀に流行した3拍子の舞曲を指したが、その低音旋律または和声をもとにした変奏曲全体も同じ名で呼ばれる。この楽章は、8小節の主題と低音旋律線(ニ-嬰ハ-ニ-変ロ-イ)にもとづく31の変奏から成る。中間部分はニ長調に転じ、のびやかにうたわれる。

[12月5日]

ソナタ第2番 イ短調(BWV 1003)

このソナタは、バッハ自身が鍵盤楽器用に編曲したことで知られる(BWV 964、ニ短調)。BWV 964には偽作説もあるが、バッハの弟子のアグリーコラは、バッハが自作の6つの無伴奏ヴァイオリン曲を「よくクラヴィコードで弾き、必要と思うだけ和声を加えた」と記している(1775年)。今日に伝わる鍵盤稿の編曲者が誰であれ、バッハが鍵盤楽器でも愛奏していたことは確かだろう。ソナタ第2番も第1番と同様、緩-急-緩-急の4つの楽章で構成される(解説の冒頭を参照)、第3、4楽章は2部形式をとる。

第1楽章グラヴェは、17世紀北ドイツのトッカータにも似たスタイルの、壮大さを感じさせる楽章。完全終止せず次の楽章につながる。第2楽章は、バッハと同世代の音楽理論家マッテゾン(1681~1764)が1737年に賞賛したことで知られるフーガで、わずか2小節と1音の主題から289小節もの長さの力のこもった3声フーガが展開されていく。主題の提示されない間奏部では、フォルテとピアノの指示で遠近感が出されるところがある。第3楽章

アンダンテはハ長調となり、穏やかさを感じさせる。8分音符の脈動の上で、16分音符を主体とするのびやかな旋律が運ばれる。第4楽章アレグロは、勢いのある急速楽章。フォルテとピアノの指示がなされ、エコー効果が盛り込まれている。

パルティータ第3番 ホ長調(BWV 1006)

パルティータ第3番とソナタ第3番は、長調作品である。

パルティータは、舞曲を主体とする組曲(上記参照)。バッハの頃の基本舞曲のうち、このパルティータに含まれるのはジグのみで、ルール、ガヴョット、メヌエット、プレがその前に置かれる。そして、全体の幕開けとなるのは前奏曲(イタリア語表記でプレルーディオ)である。この組曲全体を、のちにバッハ自身がリュート用に編曲している(BWV 1006a)。

前奏曲は、高い音域で印象的に始まる。1本の弦(多くは解放弦)で同音を繰り返す間に、別の弦で旋律を奏でていくバリオラージュと呼ばれる技法を活用し、豊かな響きを聞かせる。フォルテやピアノの指示もなされ、効果的にエコーが聞かれる。この協奏的な前奏曲は、オルガン独奏を伴うオーケストラ作品に編曲され、教会カンタータ中の器楽楽章として2度用いられた(BWV 29/1、120a/4)。第2楽章ルールは、付点リズムをもつ6/4拍子の穏やかな舞曲。前半も後半も模倣的な2声部で始まる。第3楽章ロンドー形式のガヴョットは、100小節の長さで、バッハの作として伝わる20以上のガヴョットのなかで最も規模が大きいばかりでなく、おそらく最も親しまれている曲であろう。冒頭の主題が同じ調で繰り返される間に4回別の音楽がはさまれる。次のメヌエットは、宮廷で好んで踊られた3拍子の舞曲で、第2メヌエットのあとに第1メヌエットが繰り返される。第5楽章はプレ。速く活発な2拍子の舞曲で、やはりフォルテとピアノが指示され、遠近感のある構成になっている。終曲のジグは、冒頭の前奏曲と似た曲想をもち、全体を軽やかにしめくくる。

ソナタ第3番 ハ長調(BWV 1005)

第1楽章アダージョは、付点リズムを特徴とする。1声で始まるが、すぐに4声の和音へと厚みを増していく。楽章の終わりは再び1声となり、完全終止せずに次のフーガにつながる。この楽章にも、バッハ自身によると思われる鍵盤楽器用編曲(BWV 968)が伝わる。第2楽章フーガは、宗教改革者ルター(1483~1546)の作曲した讚美歌《来たれ聖霊、主なる神 Komm, Heiliger Geist, Herre Gott》とよく似た旋律の主題をもち(ダハシュタイン作の《バビロンの川のほとりに》とも似ている)、354小節もの規模に展開される。讚美歌との類似が指摘される主題だけに、順次進行が多く、声楽的である。この4声フーガでは、201小節目から鏡像型の主題が提示された後、288小節目からは冒頭の66小節が再現される。第3楽章ラルゴはハ長調となり、8分音符のバスの上で明るく愛らしい旋律が奏でられていく。第4楽章アレグロ・アッサイは、16分音符を主体とする無窮動的な音楽。ヴァイオリンは広い音域を快活に駆けめぐる。